

味な料理がずらっと並んでいる。既に殺害された者たちの手には、武器の代わりに、料理の盛り皿が握られている。側には盃がいくつも覆され転がっているが、それらの盃が、それから飲んでいた者たちの手から落ちたのか、それとも石の代わりにそれらを使った者たちの手から落ちたのかは、判然としない。突然の災いが咄嗟の機転を生じさせ、武器の代わりに壺を使い、酒で以て血を醸造し、宴会気分で戦闘に加わる術を教えたからであった。」

11. クレオフィラは救いの手を求めて自らアルカディア国に逃れて来たとは、これ以前にも以後にも明確にしていないが、ここでは、その主張が正しいかどうかの詮索をするよりは、群衆の心に揺さぶりをかけるその力強い雄弁を嘆賞するのが望ましい。
12. この歌は、「第1巻」掉尾に置かれた、同じ臆病なダメタスの勝利に奢る歌と対応する。
13. 全ての物語の発端となった重要な託宣自体は、「第1巻」の最初に置かれているが、その4項目に及ぶ内容をバシリウスは自分に都合良く解釈して安心してしまう。
14. この讃歌には異教神話の出来事が鏤められているが、歌われている精神は完全にキリスト教的なものである。
15. 太陽が宇宙を照らすように、神の光が人間の精神を照らす。天動説を奉じる宇宙観では、太陽は、地球の裏側を通るとき、その光が大地の陰に入って人々の目からは隠されていようとも、夜にでも照り輝いているように、神の永劫に遍く輝く光は、人間の精神の暗闇によって、人間からは隠されて見えないのである。
16. アポロンが大蛇ピュトンを殺すのは、オウィディウス『転身物語』巻1、434行以下を参照。この逸話は「蛇のごとくとぐろを巻いた過誤が、真理の光によりて撲滅される」というようにキリスト教化されて、ピュトンは悪魔に、アポロンはキリストに準えられることになる。
17. 光＝知識であるあなたが大蛇を退治されたということを知っているだけで、我々人間は、蛇の中に忍び込んで人類の最初の祖先を騙して禁断の木の実を食べさせたセイタンの罪を免れることが出来るという意味。
18. ゼウスはヘラと結婚する前にレト〔ラトナ〕に求愛し、レトは二人の偉大な神、アポロンとアルテミス〔ディアナ〕を産んだ。レトは妊娠中に諸国を放浪しなければならなかった。どの土地もレトにとって安息の地とならなかったその理由は、嫉妬深いヘラが、自分の子供たちよりも、レトの産む子供たちの方が偉大になることを知っていたので、あらゆる国々にレトを受け入れてはならない、また太陽の照る所ではレトに子供を産ませてはならないと、厳しく命令していたからである。出産の神エイレイテュイアがヘラの厳命でレトに付き添うことを禁じられたために、レトはアポロンを出産するときに9日9晩陣痛に苦しんだ。この挿話は、善は刻苦と犠牲を通じて達成されることの範例とされた（オウィディウス『転身物語』巻6、332行以下を参照）。
19. 『アストロフィルとステラ』11番9～10行に「お前は、自然の宝石箱にステラを見つけたときも、すぐに目を留めたのは彼女の眼の中に映っている二つの赤ん坊」とある。エリザベス朝の詩では、恋する者が愛人の眼の中に自分の映像を見るというのは、常套的表現であった。
20. これら二頭の怪物が何かという答えについては、前者は「眼鏡をはめて二本の杖をついた人間」、後者は判然としない。
21. この問答歌は『ニュー・アーケイディア』第2巻第12章に現れるが、そこではブーロンがバシリウスに入れ替えられている。ブーロンのここでの役割は、プランガスの自暴自棄的な激しい悲嘆を、本質的に聖書の箴言によって抑えようとするもので、人はいいが人の軽いバシリウスには、あまり向かない仕事であろうと思われる。この詩の詳しい注解については、当該作品の拙訳書（大阪教育図書、1997年）をご覧ください。
22. エジプト王セソステリスの伝説的所業については、ヘロドトス『歴史』巻2に述べられている。
23. ヘロドトスでは、アマシスは元々一介の兵士で、後にエジプト王になるが、セソステリスの息子ではない。

まの間に牧歌を歌い始め、荒れ地でこだまがかえってくるように自分の声を調節して、他の羊飼より声高らかに歌い、至極自然に自分とこだまの対話を作り上げた。それは、次の六詩脚でフィリシデスが語ったものである。

注 解

1. ウェルギリウス『アエネーイス』第5巻、659行以下に次のようにある。「意外の異象に胸衝かれ、女たちたちまち狂乱に、／おちいり叫びを上げながら、陣の内なる火床より、／火を取り出せば他の者は、四つの祭壇掠奪し、／揃って船に炬火と、葉付きの小枝を投げ入れる。／たちまち火の神縦横に、權座と權と色を塗る、／松の材の船腹の、間を通じて燃え上がる」（泉井久之助訳）。
2. アラクネはリュディアの生まれで、染め物の名人イドモンの娘。機織りが巧みで、織物の守護女神パラス〔アテナイあるいはミネルヴァ女神の別名〕にも負けないと冒瀆的な言葉を吐いていた。パラス女神は貧しい身なり老婆に変身して地上に降り立ち、アラクネの慢心を戒めた。しかしアラクネが女神の忠告を無視したため、本来の女神の姿に戻り、アラクネの挑戦を受けて織物の腕前を競うことになる。パラス女神は傲慢不屈きな人間の運命を図柄に織り、一方、アラクネは神々の奔放な色恋沙汰を織り込んだ。実際、アラクネの織物の出来栄は、女神のそれに勝るとも劣らぬ見事さであったにもかかわらず、腹立ち紛れに女神は、アラクネの織布を引き裂き、織機の梭でアラクネを打ちすえた。アラクネは縊死しようとしたが、女神はそれを許さず、アラクネを蜘蛛に変えた。（オウィディウス『転身物語』巻6、1行以下を参照。）

この場合、ギネキア妃はパラス女神と同じく、アラクネに擬せられたフィロクレア姫への嫉妬と復讐に燃え、かつ母親としての絶対権力を掌握している立場にある。

3. 当時の諺に「群衆の数が多いだけ、ますますその心はてんでバラバラ」とある。
4. ドロスの恋慕するパメラ姫からの寵愛を指す。
5. ドロスとフィリジデスのこれら二つの対照的な詩は、内容的にいわば正と反の役割を果たす。また、各々14行で書かれているが、これはソネットではなく、3つのテルツァ・リーマからなる12行に、結末としての対句が付されている形である。両詩とも『ニュー・アーケイディア』では省かれているその訳は、その作品におけるフィリジデスの役割が全く変化したからである。
6. フィリジデスの愛するミラが彼への好意を引っ込めたことを指す。
7. 酒と陶酔の神バックス〔別名ディオニュソスで、元来は、豊饒神〕は、ヘシオドス『神統記』以来、主神ゼウスとテーバイの創建者カドモスの娘セメレの息子とされている。ゼウスに愛されたセメレは、夫の浮気に激高したヘラの策略に欺かれて、ゼウスがヘラに近づくときと同じ姿で人間である自分の許へ来るように求めた。ゼウスはいかなる願いをも叶える約束をしてしまった手前、やむを得ず雷光と雷鳴と共に戦車に駕してセメレの臥し所を訪れ雷霆を放った。セメレは堪らず死んだが、ゼウスはセメレの体内に宿る6ヶ月のバックスを素早く取り上げ、自分の太ももの中に縫い込んだ。月満ちてバックスが生まれると、使いの神ヘルメースに命じて、バックスをオルコメヌス王アタマス夫妻〔一説には、ニュサ山の洞窟に住むニンフたち〕に預け、女として育て、ヘラの眼をごまかそうとしたという（オウィディウス『転身物語』巻3、310行以下参照。）
8. “大食”“食欲”の意で、この町の人々の特質を暗示する。
9. このように、反乱勃発の発端にある根本原因は、一国の君主として大きな政治責任のある者が、政治と人民の生活を蔑ろにして、自分勝手な都合で隠棲生活に遁走することにある。バシリオスの王としての力量が疑われる所である。
10. 『アーケイディア』の典拠の一つで、3世紀のギリシャの作家ヘリオドロスが物したロマンス『エチオピア物語』に、似たような箇所が見られる。「食卓という食卓には、眼に彩でいかにも美

いてもらったことが王子たちは何よりも嬉しかった。王女たちに自分たちを
 評価してもらうことが王子たちの最大の関心事であり、王子たちが己の命より
 大切に思っている王女の名譽を自分たちが求めることが不名譽なことでは
 ないことを王女たちに知ってもらいたいと王子たちは思った。しかしもちろ
 ん、王女二人の満足は測りしれないもので、信頼を教えた愛に加えて、これ
 らの出来事の状況から、二人の王子が自分たちに愛を捧げる者に他ならない
 とわかったことであろう。パメラ姫もフィロクレア姫も自分の恋人のことで
 頭が一杯だったので、相手の恋患いをわざわざ問題にはしなかったのだが。
 それで、パメラ姫は女戦士のことを、フィロクレア姫は羊飼のことを思いつ
 きもしなかった。一方ギネキア妃は、クレオフィラのことで頭が一杯で、ク
 レオフィラしか眼中になく、他の者の言うことは耳にせず、クレオフィラの
 ことしか想わなかった。かくしてヒストールの語りは何の注意を払われるこ
 ともなくギネキアの耳をすり抜け、ギネキアは想像力のすべてをからまりつ
 かせている恋の相手には何の関わりもないと、はなから決めつけてしまっ
 いた（物思いにふけっている人々は大抵そうなのだが）。バシリウス公は幾度
 かヒストールの語りをやめさせようとしたが、クレオフィラが進んで語り手
 ヒストールの聴衆になろうとしているのがわかると、クレオフィラをがっかり
 させるのではないかと恐れた。しかしバシリウスは、高名なピュロクレス
 をあまりに誉めすぎて、クレオフィラの心をピュロクレスの方へなびかせる
 ことになりはすまいかと恐れた。クレオフィラとピュロクレスの偉大さを比
 べると、二人はこれ以上はない組み合わせだとバシリウスは己自身に告白せ
 ざるを得なかったし、そう考えてクレオフィラの若き心がピュロクレスの方
 へ動かされるのを恐れたからである。そこでバシリウスは、ヒストールが語
 り終えるか終えないうちに、再び二人の王子たちの話を始めないようにと、
 恋人の心から追放されて自分の肉体に閉じこめられたかのように物憂げに座
 しているフィリシデス（彼はいつもそんな様子なのだが）に呼びかけた。そ
 して、いつものように他の羊飼いたちと牧歌を歌うようにバシリウスは望ん
 だ。フィリシデスは（大変いやいやではあったが）バシリウス公の命に応じ
 てラルスと歌うことを申し出たが、ラルスはあからさまにフィリシデスを拒
 絶し、自分は数日のうちに美しいカラと結婚することになっており、想いが
 叶ったからにはもう歌いたくないと言った。そこでバシリウス公は、アルカ
 ディア国では新参者で、皆には知られていないフィリシデス自身のこれまでの
 境遇を明らかにするよう彼に望んだが、今はとても喜ばしい時なので自分の
 悲運の吟唱は耐え難いからと、フィリシデスは公にお許しを願った。され
 ど、フィリシデスはバシリウス公を何とかして満足させるため、自分とこだ

ぬのだから事が外に漏れることもなかろうと、これだけのことを若者にばらしたのです。「もう今頃は」とテルムシス、「王が私の大事な御主人様に危害を加えているかもしれません。こうして私が悲惨にも破滅させてしまった御主人様に。」確かに王はそうするつもりでしたし、ゆくゆくは殿下を殺すつもりでした。あたかも服を着替えて逃亡しようとそこへ逃げ込んだかのように、殿下は王妃の命により無理やり屋敷から連行されました。可哀想な殿下は目覚めたばかりで驚きのあまり、言い逃れをするより言われるままの非を認めたのです。ところが王は（労して一件を徹底的に調べようともせず、様々な状況からしてなしくずしにされるのが当然として、アマシスの言葉に耳を傾けようともせず）ただちに殿下を紅海まで運ばせました。そこで部下も付けず一人っきりで船に乗せると、風の意のままに任せることにしたので、ところが二人の王子はテルムシスの話により事の由来を了解したので、彼を連れメンフィスに入りました。哀れな殿下が死の船に向けてすでに数マイル先へと運ばれていたからです。このことが分かっていたので、彼らは王に真相を告げてから殿下を救出する暇はないと思い、まずは殿下の後を追ったのです。殿下を喜んで助けようとする国の数名の者たちの助力や武力に訴えて、彼らは無事に殿下を敵の手中から救い出しました。それから殿下を王の許に連れてゆくと、テルムシスの告白より王にすべての事情を理解させたのです。テルムシスの姿が見えなかったことや他の多くの点を考え合わせれば全く逆であると分かったのかかわらず、先を急いで一人息子を糾弾したことで王本人がいかに大きな罪を犯したかを考え、王子たちはテルムシスの許しを王に請うたのです。王妃については許しも罰ももう必要がありませんでした。なぜなら事の次第が暴露されるのを聞くと、王妃は自ら命を絶ったからです。『こうして』プランガス殿は申されました、『王子たちは固く結束した父と息子を後に残し、アマシスは王子たちを命の恩人と深い親愛の情を持って感謝したのです。（アルタクシアがどんなに王子たちを憎んでいたかを知っていたならば、殿下はそうはしなかったでしょうが。）お二人はおそらくギリヤへ戻ったと思われます。プランガスはまだ王子等を追っていたのですが、多くの災難がふりかかりどうしても彼らを見つけることが出来ませんでした。今やプランガスは王子たちの国のどちらかに居るものと望みを託していました。もはや王子たちが海の藻屑となり果てたのではという大きな疑いは心を離れませんでした。』

このように、ヒストールはそれら二人の立派な人物の偉業をかいつまんで語り（そこにいる二人が本人たちであるとは気づかないけれど）、王子たち自身の耳を自分たちの栄光の立会人とした。その語りを、最愛の王女たちに聞

セソストリス国王は、アマシス殿下のお母様が亡くなれると、若いご婦人と再婚なさいました。この後添は、継母が先妻の子を憎悪するというよくある行状を、義理の息子アマシス殿下に対する余りにも放埒な恋情へと変えてしまわれたので、息子にとっての父という名も、妻にとっての夫という名も、また二人の間の母と息子という名でさえ役には立たず、もし応じれば邪悪の道を歩むことになりかねないことを、この婦人がアマシス殿下に無闇に求めることから引き止めることの歯止めにはならなかったのです。しかし殿下は(美德への忠義に加えて)、御心をすでにペルシアの女王アルタクシア様に捧げておられたので、継母が自分を愛すれば愛するほど、余計に毛嫌いなされたのです。この女は、息子に嫌われてむしゃくしゃするあまり、恥辱、軽蔑、そして情欲が沸き起こり、全ての情愛を最も恐ろしい復讐の憎悪に変えてしまい、あらゆる努力を傾けてアマシス殿下を破滅させる邪悪な策略を練り、終に、この若者がそのきっかけを与えてしまうことになったのです。

「若者が彼の主人にそっくりなことを考慮に入れ、王妃はそのかわいそうな若者を彼に生き写しの主人への敬意から極度に目をかけているように思わせ始めたのです。若者は主人とは秘密裡に通じていたので、王妃が主人を節度もなく愛していることはよく承知していました。テルムシス(若者はそう呼ばれていました)は美わしき王妃が自分に好意を寄せて下さることを知ると、天空の星々まで身分が上がったように有頂天になったのです。王妃は(それほどに罪の奴隷に成り下がっていたのですが)、その熟れ切った肉体を若者への口止め料としました。こうして王妃はテルムシスを放恣の餌で釣り上げると、今度は王の寝台を汚そうとしたと王に向かってアマシスのことを誹謗し始めました。セソストリスは王妃の意見を全く鵜呑みにしたわけではありませんでしたが、少しは引っかかっていた。するとある晩、王妃はテルムシスに(心底王妃に尽くしていたので)、その日主人が着ていた衣服を身にまとして王妃の寝室までやって来させたのです。彼は剣を携え、寝入っている王の息の根を止めるよう王妃から促されていました。ところが寝室に入るやいなや王妃は王の目を覚まさせました。王はテルムシスの姿を見ると(蠟燭の暗さとその衣服に惑わされて)、息子が自分を殺そうと侵入して来たと見誤ってしまいました。哀れなテルムシスは仰天して逃げ去りましたが、王妃は四人の信頼できる従僕たちに後を追わせました。王妃は前もって彼らに、テルムシスを見張り、彼が部屋から飛び出すと(いかにも王妃の命令で助けるようなふりをして)、どこか人目につかぬ場所に誘い出し、そこで彼を殺害せよという任務を与えていたのです。若者を殺すよう命令を受けた四人の中の一人が(エジプトの王妃が最も信頼する男でしたが)、どうせすぐに死

がない林檎売りの男と結ばれたそうでございます。) また、王子たちがエジプトへ向かったのは、その国の宮廷の大いなる名声を耳にしたからで、宮廷は王の威厳のために、勇敢な騎士で溢れ、且つ国は正しき法と慣行により組織的に統治されていて、学ぶに相応しい場所であると思われたからなのです。

ところで、パレスチナからエジプトへ向かう荒れ果てた道すがら、二人が遭遇した多くの名立たる事件は、たっぷりと数巻本に纏めるのに相応しいもの。ただし、プランガス殿の悲嘆にくれた御心は、長談義に耐えきれず、それ故急いで王子たちの活躍について大雑把に話して下さったのですが、確かに聞いていて大いに感激致しました。

「でもプランガス殿は、お前にその先を話して下さらなかったの？」と世にも美しいフィロクレア姫が口を開いた、「その王子様方のことについて……」

「お話し下さいましたとも」とヒストールが答える、「エジプトで二人が遭遇した奇妙な事件とは、このような物語でございます。二人で馬を駆り六マイル程メンフィスの都から離れた所で、哀れを誘う叫び声が聞こえてきました。それはまるで極度の悲嘆か又は差し迫った恐怖のせいで、身を護る武器として自分の声しかない人の叫びのよう。声の主の許へ通じるはずと思われた一番近い道を駆けて行くと、目にしたのは上品な身なりで見事に均整のとれた体格をした一人の若者が、四人の殺気にはやる悪党どもの手中にあるところ。悪党たちはいつでも若者を殺せるようにと身構えていましたが、若者が莫大な財宝の隠し場所を知っていると告げたために、一旦は手を止めていたのでした。強欲のせいで殺すのを一時控えはしたものの、中の一人が、こいつの言うことを聞くのはもううんざりだと、致命傷を負わせようとしたことに脅えて、若者が叫んだのでした。けれども仲間の三人がこの男を止めているうちに、(若者にとっては都合よく)二人の王子たちがやってきて(どれ程正当な理由があって、若者が死に値するとしても、四人の男が若者を殺そうとしていたその遣り方は不当であると見てとり)、一行の中へ割って入ると、若者を解放しないのならば、こちらにも考えがあるぞと迫ったのです。悪党どもは、(二人の豪胆さよりも、自分たちの方が数の上で優っていると踏み)、その命令を笑い飛ばしたのですが、やがて仲間三人が殺られると、四人目は、逃げるが勝ちと決め込んで捕虜の若者を王子たちの手に委ねたのです。若者は、(命の恩人である二人に跪き)災難のそもそもの原因を語ったのです。こんなふうに。若者が仕えていたのは、エジプト王セソストリス²²の嫡男であり、王位継承者でもあるアマシス殿下²³で、若者はその信頼を最も得ていた従者でした。年も同じで、また容姿も瓜二つだったために(とは言っても身分には天地の差がありました)、殿下と若者とはほとんど区別できないほどでした。

王子たちはアンドロマナの女心を哀れみ、そのアラビア人がどう弁解するか知りたくなりました。そこで彼女の許へ赴き、助力を申し出たのです。ところがアンドロマナは王子たちの馬上槍試合での活躍や個別の戦いにおける勇壮ぶりを目にするとまもなく、彼女が大きな犠牲を払った昔の懸想をすっかり忘れてしまったのです。そして想像できるかぎりの痛ましく奇妙な愛を募らせるようになりました。つまり彼女はまったく相等しい熱情で二人の王子を愛したのです。唯一の差といえばピュロクレスを目にすれば彼を一番欲しいと思い、ムシドロスを見つめればピュロクレスの方が負けていると思うことでした。このような言葉を耳にするとパメラ姫とフィロクレア姫二人の目が、罪を犯しはしなかったかと問う視線を彼女たちの恋の奴隷に投げかけるのに気付いた人もいられるかもしれません。ともあれヒストールは、アンドロマナの二股の欲望について話を続けた。アンドロマナは、ムシドロスを眺める時には、香り立つ小麦色の肌こそ一番ぞくぞくする美しさだわねえと思い、一方ピュロクレスの抜けるように白い肌と紅の唇を目にすると（そうした違いがプランガス殿の言によれば、二人の王子たちには見受けられたので）薔薇と百合こそ世界一美しい花だわと思うことでした。ムシドロスは兄貴格でより逞しいため、ピュロクレスはより若くて華奢なために、アンドロマナの意に適っていたのです。結局この貴婦人は、時にはムシドロスがピュロクレスであれば良いのにと想い、また或る時にはピュロクレスがムシドロスであれば良いのにと想うといった具合で、常にこの二人が自分のものであれば良いのにと考えていたのです。ところが王子たちの方は、（恋よりもっと立派なことに恋しているように思われて）全くもってこの貴婦人の意図を挫いてしまったので、婦人は暴挙に出ざるを得なくなり（策を弄して）二人を無理やり牢獄に押し込めてしまいました。そこで一体どんな誘惑を彼女が見境なく行ったのかは語れば長くなりますが、つまるところ、王子たちは迫られれば迫られる程一層頑なに彼女を拒絶し続けたのです。（二人の勇気は何に対しても強いられることを潔しとしなかったのも、このためにかなりの日数をすっかり牢獄で無駄に過ごしてしまいそうな様相を呈していた所、例のアラビア太主が（幽閉の噂を聞きつけて）自らの武力に自惚れて、パレスチナを征服せんと野心を燃やして攻め入って来たのです。パレスチナの民衆は、これを察知すると（アンドロマナの意向に拘らず）王子たちを解放し、王子たちもまたその返礼にと見事な活躍で民をアラビア人の手から解放したのです。それから二人はエジプトへと向かい、多情に燃える貴婦人から逃れました。（アンドロマナは程なく、プランガス殿によると、置き去りにされると、王子たちのことはすっかり忘れてしまい、何人も男を取り替えたあげく、終にはし

賛を誇らしく思いました。しかし、王子たちは入城するやすかさず剣を抜き、巨人を窮地に追い込みました。危うくなると、巨人は常用していた巨木に駆け寄り、それを武器にして（いつも鎧は身につけていたので）信頼する竜を放ちました。その邪悪な一組は無双の王子たちと渡り合い、王子たち（彼らには剛力があり、それを呼び覚ますだけの剛胆さがあったので）は、瞬く間にそれらの怪物たちの住処を破壊し尽くし、ピュロクレスは龍を、ムシドロスは巨人を殺しました。人々がどれだけの賞賛を王子たちに捧げたことか（彼らは救い主に対するかのごとく二人を称える儀式を守り続けていますが）、それは語り尽くせないほどでした。

ところでその後、王子たちは二人の兄弟の間で生じたとある大きな戦争の風評に導びかれることになりました。弟が兄（シリアの王でしたが）に対して謀反を起こしたのです。そうせざるを得なかったのは、父王が相続の分け前として弟に与えたダマスカスの公国を兄が横取りしたからです。その地で王子たちが発揮したのは、彼らの勇気と肩を並べる知恵でした。一人は片側に、もう一人はもう片側に参戦し見事な戦いぶりを示したため、どちらの陣営も世界で一番勇敢な戦士が味方に付いていると信じて疑いません。それゆえ、元々は一つの国民である双方での多数の流血を避けるため、事の成否を二人に任せることに同意したほどでした。ところが（事態は例外なく彼らの手に委ねられたので）彼らが戦いの代わりにしたことは仲裁であり、元来自然がしっかりと結び合わせた絆を断ち切ろうとした過ちを兄弟に恥入らせることでした。しかも君主を徹底的に怒らせた者は誰であれ、その統治下では決して身の安全を完全には保証されえないことを想起し、王子たちはこのように決定を下したのです。王は弟の分け与えられた公領に匹敵する財貨を支払い、その代償としてダマスカスを手中に収めるべしと。それから彼らは弟が君主の器であることを知ると、パフラゴニア人に対する自分たちの信望を大いに利用し、その美しい国の女相続者と結婚させたのです。こうして王子たちは知恵と寛容と勇気の永遠の記念碑を残すことになりました。

しかしこの後、次なる注目すべき機会が王子たちに訪れました。（百々たる彼らの武勇伝についてはプランガス殿とて語り尽くせず、繰り返す時間もなかったのですが）、パレスチナの資産家のある貴婦人（アンドロマナと呼ばれていました）が王子たちのたぐい稀なる剛勇ぶりのことを耳にし、アラビアの若き大公とのことで助力を請いに使いの者を寄越しました。大公は彼女と結婚の約束を取り交わし、その上で子供を産ませておきながら、今となって彼女を捨てたのです。大公が寝台の方をしっかりと手配する前に、彼女が教会の方を手配するぐらいの分別を持つべきだったとわかってはいましたが、

ばと思い至った。そこでヒストールが前回の歌競べで、ムシドロス王子（その時姫はまださほど関心がないままに）について語っていたことを思い出し、もしまだ記憶に留めているのなら、今語って欲しいとヒストールに熱心に望まれた。一体どんな不思議な冒険をして、二人のギリシアの王子たちは、オタネスを誅殺し、またエローナ姫を王国に復帰させた後、エローナ姫の許を去ることになったのかを。ここまで頼んだところでパメラ姫は、慎重に考慮もせず、ただ激しい欲望に駆られていたことに気付き、もしや過ちを犯したのではないかという恐怖から、匂やかなその身体はまさに震えた。ところでパメラを信奉する羊飼ドロスは大喜びだった。それは自分の手柄を話してもらえるからではなく、自分についての質問が姫の口から出てきたからだ。一方、ヒストールは答えて語る。プランガス殿はテッサリアとマケドニアへ向けてお発ちになる前に、私めの再三の要望に応じて、実際にその件について簡単にお話下さいましたが、そうした事柄には多くの込み入った仔細があり、優れた歴史家にとってさえ、手間のかかる仕事なのだと始終こぼしておられました。まず第一の冒険というのは、巨大で怪力の持ち主（それゆえ一般に巨人と呼ばれておりましたが）の物語でございます。この怪人はパフラゴニアの国全土を荒らし、高い岩山の頂きに盤石なる城を構えて守りを固めておりました。また城には世にも恐ろしい飛竜を飼い、若い頃から巧みに操る術をもって訓練したため、この竜は最もよく馴らされた鷹以上に巨人の命令に従うのでした。竜は国外へも飛来し、信じ難い程の危害を加え、また必ず律儀に城へ、巨人以外に男は誰一人生かしておかないこの城へと舞い戻るのでした。巨人自身の力にも加えて、こうした状況がみじめな人々をその命令に従わせました。その命令とは、人々がひと月ごとに16歳以下の乙女を二人と19歳以下の少年か青年を二人、巨人に送らねばならないというものです。巨人は女性をその獣じみた快楽に使い、城に閉じこめておきました。そして、青年たちは邪神に生贄として捧げるのが常でした。このことは、雄々しく若き王子たち（事態が困難であればあるほど、王子たちの心はそれを成し遂げんと奮い立つのですが）の耳に及び、王子たちは惨めな人々の所へと赴き、そこで（国のためにいやおうなく子供たちを連れ去られた両親たちが、口々に訴えるひどい苦情を聞いて）、人々にそれ以上の妙案がなければ、自分たちが来月の身の代を支払うと申し出ました。王子たちの美しさに人々は皆憐れんだが、結局、自分可愛さが憐れみに勝り、約束の時は来て、王子たちは長い装束の下にひそかに武装し袖の下に短剣を持ち、そうして彼らを送り届けるよう命令された男に巨人のところへと連れていかれました。三人以上は入城を許されなかったからです。巨人は王子たちの顔を見て、その美しい生け

忘れえぬ 姫の申されし奇妙な言葉は
 今すぐ妾に火責め 水責め 縛り首をと望まれし
 まるで死が唯一救いの道と言いたげな様は
 ならばまた 彼我の区別を忘れ去りたし
 プランガスと呼ばれることを 忘れられたら
 また 我が母の子であることを忘れ去りたし
 だがもしも 我が追憶が斯く奴隷となる運命なら
 五感すべてを征服せし かの不思議なる一撃の
 常に安ずるこの想い 震えず安らかにおれるやら
 ブーロン。 絶え間なく己自身を攻め立てるもの
 如何なる赦しも効き目なし また自らすすみて
 己自身を傷つけるなら 如何なる盾も通用せぬもの
 哀れな男に災いあれ 個々の皮相 様々な事に煩いて
 しかして心は満つることなく
 内なる悲嘆を山となし 散々己を破壊して
 斯く我らが想い 苦勞しても薊のために鋤かれるごとく
 斯く最も高貴な部分さえ 心痛のあまり枯れ果てる
 斯く精神は あまりに大きな憂いに散りゆく
 一日は 明日のために悲嘆の因を積み上げる
 幸運により 悲嘆に備えぬままに済んだ者として
 友情から 悔やみの種を借りて泣きぬる
 善と 善の影とに引き裂かれて
 単なる脆さを 我らは憐憫を見做すに
 斯く我ら 至高の創造から滑り落とされて
 だがプランガス殿 私があなたの病を診断せぬように
 また擦って傷を酷くせぬよう ここで歌を止めたいと
 ろばは キスがしたくて 却って傷を負わせたに
 ヒストール。 斯く語り 二人はそれから行ってしまうと
 私とても潮時で 羊は千々に離れ去り
 二人の詩を 拙き筆で綴っていると
 ところがその夜 我があばら家に二人が泊まり
 プランガス殿は 不思議な話をまた語られた
 だが声も枯れ喉も乾いた 我が牧笛はこれにて打ち切り

あまりにも巧みに、ヒストールの声音がプランガスの悲嘆を伝えていたた
 めに、聞き入っていた高貴な人々は皆心を打たれて沈思してしまった。実の
 ところ一人一人が、プランガスの物語を自らが抱える恋の難題の天秤に掛け
 ていたのだ。パメラ姫がまず最初に必要な^{ねぎら}労いをヒストールにかけてやらね

ああ唇よ 我が涙の雫に濡れし姫の手に触れなむ
ああ舌よ その折は黙し 敢えて心の傷を語らぬに
ああ魂よ 姫への愛のみに使い果たされむ
汝等がかつて見 想い 触れ 口づけ 語り 愛したものを
すべてを姫に 姫に向けて捧げまつらむ
ブーロン。 そなたの嘆き いたく揺さぶらん我が魂を
そして我が意志とうらはらに
我認めん 悲しみの力 心に深く突き刺せしことを
我そなたの熱情を共有するために
窮乏という鏡に映されしは 我身の無力なり
自責の念を感じる者は 憐憫の情につき動かされやすきゆえに
されど理性はかく語り
理性は俗事をやすやすと 出入りさせて
しかるべき釣り合いを 保つ力を持てり
ところが 欲望という暴君が無理じいして
最大の悦びを用意させるも
仮の休憩場に過ぎぬ場所にて
我ら完膚なき高潔に 欠けるといへども
この子供じみた余計事を 手なづけんと望まんや
瞬きするなかれ 曇りなき視力に欠けていようとも
偏屈な不調和を 生み出す者はあらんや
女々しき嘆きに屈服する男に増して
さらに調和のとれた文法の教えをいざ学ばんや
プランガス。 もし我が耳を突き抜ける 聡き訓諭 甘美な音色とて
あるいは詩人の物語りさえ 僅かな慰安にならぬなら
もしおぞましき絶叫を 我らが幾らか止めようとて
かたや 我が魂なる御方 姫が苦難に生きるなら
我が命 長く大地にとどめ給えよ
悲惨なる我には それが最後で最悪なる呪いだから
姫の聖なる品々を一度識れば 隔てられぬよ
歓喜から また運命が姫を卑劣に追放したと知ったので
道を説いても 憤怒の苦悩をおさめられぬよ
忘れえぬ 奴等が牢に姫を閉じ込めたので
遺恨と当然の侮辱で胸を膨らすに
姫は死への床に臥す 私がその紐を解き姫を楽にする日まで
忘れえぬ あまりに大きな嘆きの苦痛に
ダイヤモンドで 硝子に刻む姫の言葉は
「エローナ死して 終わりを告げぬ醜き苦悩に」

失くして嘆く 持って嘆いたその憂い
プランガス。 姫が死ぬ？ 残酷な炎が消してしまう？
姫の瞳の輝きを 斯くも数多の心に火をつけしに
死神さえも愛にて殺めうる力 姫なら持たぬはずなからう？
否 冷血な死神でさえ 火をつけし 己が熱き欲望に
姫を楽しまん（歓喜自体 姫の言いなり）
大地から最も豪華な衣を剥ぎ取りに
斯く死神は 我らすべての恋敵となり
汚れた胸で 姫を抱かんと望みて
墜落の内に 美德の宮が落ちる定めとなり
ああ脆き美德よ 決して朽ちてはならぬ汝が戦利品の上にて
死神に勝利を築かせてはならぬ
死神の息の根をまず止めよ 汝がやつの天敵となりて
いかなる食でも かの太陽 姫の顔は曇らせぬ
いかなる地雷も この麗しき塔は倒せぬぞ
いかなる冒瀆も これ程の聖女は汚せはせぬ
世界が庭なら 姫は名花ぞ
庭中甘い香で満たす また姫は類い稀な
貴賓にて 天地がこぞって姫の間ぞ
（ああ）このすべて 灰に埋めて捨て去るとな？
悲しいが もし不死鳥を新たに陽で焼くつもりならば
姫がまず 寝屋を建てねばなるまいな
だが承知の如く 救うであろう心優しき太陽ならば
これほど己に似た光 かの力さえ持つやも知れぬて
太陽に パエトンの母の哀願呼び覚ますなれば
それ故にああ 汝は卑しきバルカンの恨みの炎を置いて
何ものをも容赦せぬ火 あの処女蠟をも溶かす
溶ける間も 全アジアを灯す光となりて
ああマルス 汝が振う大鉞は一体何を打ち倒す
寝取られ野獣のバルカンに むぎむぎ姫を溶かさせるなら
汝が愛しきヴィーナスの子で 美はヴィーナスをも凌駕す
ああヴィーナス（娘への賞賛も 汝が高貴な心なら
何の嫉妬も生まぬ筈）汝が夫ヴァルカンに姫のことをとりなし給えよ
甘美な言葉は 下劣な心をしばしば改めるものだから
ああ我が眼 そはかつて姫がその顔を映せしところよ
（姫の顔 我が心に尚鮮やかに生きるに）
ああ頭脳よ 姫への想いのみ宿れるところよ
ああ我が手 別れ行くとき姫のその手に触れしに

我見えし エローナ姫の煌^{きらめ}く髪が
両の手で引きちぎられ 雪の如く真白なその手も
純潔の血を流し 自らを引き裂くその様が
我見えし 美の品々が溢れ出す姫の乳房も
溜^{ため}め息で膨れ 心^{こころ}勞で蒼ざめり
かの眼^{まなこ}双子の太陽が注ぐ涙の驟雨も
我聞きしは 姫の嘆きの言葉なり
（その言葉 糖蜜漬^{はちみつ}けで 甘く馨しい息で出来ぬ）
かつてそれ程苦しんだ想い 今和らげるなど出来ぬことなり
否 否 絶望が我が日々の訓諭を語りぬ
斯くの如 たとえ我 人生より逃げようと
ブランガスは生き 姫の死に目に遭わねばならぬ
ブランガスは生きねばならぬ 姫のお役に立ちたいと
絶望にうち拉がれても努力する 愛神が我に強いるよ
ブランガスは生き エローナ姫は死なせるのかと
エローナ姫の死？ （もしも神が在ますならば）ああ神よ
天を巡る星々も これ程力無きものなからむ
夜空に輝くその目でさえ こんな耻辱の見守り役よ
鈍^{のろも}間を急がせ 美しき祭壇を幾つも築かむ
いと高き神々へ 天にて怠惰に鎮座在まし
千辛万苦のこの時に 美德を無視する神々様に捧げ奉らむ
ブーロン。 ああ君よ 君が如何に神々を駆り立てるか気をつけられたし
己が抗えぬ当然の怒りへと神を駆り立てるのに
不敬な言葉は語り手がうぬばれているという証
ああ 我らが自己愛の深い霧に
包まれている間（激情はこうも人を欺くか）
傷つけられたと思うのだ 神々が大いに助けし時に
我ら虫けらを傷つけんと 裁きの神は捨てるというのか
彼の本質を？ いや彼自身を？ 正しく裁くのが彼の本質なるに
我らが敗北から 神は如何なる栄光を授かるのか？
だが眩んだ眼では 前途が見えずに
神の振う甘美な鞭を 我らは愚痴る
至福へと 打って教える優しき道とは気付きもせずに
姫が死にゆく定めなら その時姫はやっと終える
禍々しき人生を 失くしたとて何故に哀しい
その惨めさを 巧みに描くが 汝である
これが人 内なる嵐が荒れ狂い
意志の波間で 逆巻く風が乱れ舞う

次はいかに過酷な苦難を降らせるのか 神々は準備万端
 過去の嘆きに これから受ける苦しみを上乗せすべく
 久しく 声はかすれ 喉は痛みを覚えん
 これぞ 空に向かって叫び 地に呪いを吐いた見返り
 だが嘆けば嘆くほど 悲しみは一層心に染みん
 何処で かの非情な技は生み出されり
 土魂^{つちくれ}で魂^{たま}を受ける器^{かたど}を模る技 されどその器は
 いずれ自ら朽ちて行く運命にあり
 何ゆえぞ かくも崇高な魂^{たま}が 薄暗い棲家を要するは
 肉で身を包み 魂はここで何も得ぬ
 哀れな人間という輝かしき名の他は
 星々の弄ぶ球 運命の女神に仕える奴隷にすぎぬ
 本当の自分からは遠ざけられ 肉体という檻に汚染されて
 死は恐れられ 苦痛が生を支えとなりぬ
 汚れた舞台を埋め尽くす役者に似て
 ころころ変わる気紛れを 間抜けが間抜けに見せておる
 猛威を振るう悲哀を除けば すべてが冗談だとて
 子供はただ感じ 大人は切に思い知る
 人生への胸騒ぎから 人は叫んで生まれけり
 知恵が付くだけ悲しみを 真から味わうことになる
 恥辱の店 夥しい紙魚の書物なり
 この肉体 そう この肉体は
 その中に骨肉の争いを育むように創られり
 この貧相な作品のなかでは四大が
 バラバラに置かれていて
 纏まるようには出来てない 安定した状態には
 この惨めな状態を教えてくれるのは悲しみだけで
 (まさに鞭で打たれて跳ね回る駒の如くなり)
 この人間とは 物言う野獣 歩く木で
 悲しみこそは 最良の判断を示す試金石なり
 悲しみを知らぬものはでくの坊とて
 どんな大義も人生から悲しみの原因を除けぬなり
 ブーロン. 全くいつまで乱すのか 其方の嘆きの調べをもちて
 うららかな野辺の織り成す朗らかな音を
 凡ゆる幸運が維持する完全の住処にて
 プランガス. 呪われよ幸運 呪われよ 幸運に希望を
 築く者 凡ゆる憂き目に遭いながら 絶望が
 最も堅固な楯とならぬ者に呪いを

もううんざりさ 頼むから羊の声でも習ってくれよ
今からでも 羊の声くらいには なるかもねえ
パス。我が父は 家に奇麗な懸巢^{かけす}を飼ってるよ
行って懸巢に勝ってみろ（喋り競べだ）讃辞か恥辱か
そしたら 勝利について お前だって語って良いよ
ニコ。答えよ（そしたら我がパン神としよう） 怪物の名は何か²⁰
4つ足でも 歩くときだけ2本足のものを
4つ目でも 2つの目だけで物を識るのは何なのか
パス。答えよ（そしたら君をフィーバスに） どんな怪物かを
あまりに強い生命力で 命が尽きるその時まで
ゆっくり体を休めることすら出来ぬものを
ディコス。もう結構 最善というには程遠いので
猫と犬とに 二人分の 喧嘩の続きを任せよう
ご褒美は どちらにも相応しいとは言い難いので

途端に二人の歌比べを聴いていた者たちは、謎かけの二匹の怪物とは一体何だろうと騒然となる始末。だがクレオフィラは、その報われぬ境遇によりふさわしいものとして物悲しい歌に心引かれるため、数日前に余所者が賢明なるブーロンに歌って聞かせていた、とヒストールが言っていた哀悼の歌をもう一度歌ってはくれぬものと切望していた。実のところ彼女は、プランガスのエローナ姫への恋の行方について是非とも聞いてみたかったのである。三人の王子とこれまた三人の王子の間で起こった戦いの際に（そのときクレオフィラはプランガスとは対峙する側ではあったが）彼の剛勇ぶりを目の当たりにしていた。するとバシリウス、彼女の意向を察するや、ヒストールに血相変えて（あたかも彼の想い人への奉仕に関することなら、いかなることでも生死にかかわるといわんばかりに）、今すぐに歌うよう命じた。ヒストールは相対する人物の違いによって声音を実に巧みに変化させ、大公の意向を叶えたのである。

ヒストール。 我 茂みの蔭におりし
声もなく さらなる理性の言葉を耳にし
その聞き覚えなし されどまず一人が嘆かん
もう一人 それを抑えん

プランガスとブーロンの問答歌²¹

プランガス。 ああこの巡礼の旅は 一体いつまで続く

コズマの美の光線は 自分の光を霞^{かす}ませるって
ニコ。ルーカが俺に 昨朝見せたよ
申し分ない光の中で 見誤るはずないわけさ
あの娘の素脚 一等白い雪より白いよ
パス。だが昨夜 僕は光を受け取ったのさ
漆黒の闇を照らす光 コズマの瞳が放ち煌^{きらめ}く
それで見えた腕^{かひな}から 一等清らかな百合が咲き出してたのさ
ニコ。ルーカは一度 一糸纏^かわず ちょっと沐浴
どっこいそれでも (俺は思った) あの娘の美貌^{したた}が滴^たって
かえって水のお洗濯 水は前より清らかで無垢
パス。コズマは一度 涼みがてらに泉に立ちて
それ以来 この泉は垂涎^{せつゐん}の的
薔薇水として こよなく馨^{かほ}しき香りを売りて
ニコ。小川の土手へと ぶらぶら行くと
ルーカが 小川に映った姿を見てよと言うので¹⁹
ああ悲し (俺は言った) その姿こそ俺の想いを育てると
パス。僕が差し出す鏡に一度 コズマが顔を映したので
僕は言った この両手 我が眼に代わりよくぞコズマを映したもののよ
我が手の内で あの人がその麗^{うつく}しき姿に うっとりしたので
ニコ。ああもしも 空に昇れる梯子があつたらよ
俺が昇って キラキラ星を持ち帰ったなら
大きく開いた襟から見える ルーカの首に飾れるのによ
パス。ああもしも アポロンの黄金の馬車があつたなら
僕は天を駆け降りて コズマに席を譲りたい
コズマの今の煌^{きらめ}きが さらに遠くまで照り輝くから
ニコ。ああルーカ お前の名誉を汚すものなど何もない
羊飼の調べが聞こえ 詩が読まれ
また 羊飼が 別嬪^{べっぴん}さんに恋する限り心配ない
パス。ああコズマ 汝が名 讃辞とともに広く拡がれ
羊飼が牧笛を吹き鳴らす限りにおいて
恋が人を虜^こにしている限りは拡がれ
ニコ。ルーカの碑を 森に建て
その名を刻めば たとえその身が朽ちようと
後世の人が いつもお前に驚嘆するだろうて
パス。幾度も森の木々は僕が「コズマ」と呼ぶ声聞いたと
僕の死後 「コズマ、コズマ」と呼ぶその声
エコーの助力で 森に響かせ天まで届けと
ニコ。静かに 黙れ おいパスよ お前の淫^{よこしま}らな歌には地面でさえ

パス。アポロは ダフネを得られなかったのではないのだ
ダフネを追い込み 月桂樹を聖なる木としたのだからな
されど アポロこそパンの調べの輝きをそこねた者だ
ニコ。おお森のフーンよ 妖精よ お前たちは皆
かような侮辱を目の当たりにして苦悩したのか なんとる侮辱よ
このニコがパスと比類されねばならぬとな
パス。おおニンフよ そなたも知るこのパス ゆえに聞けよ
僕が鳥のように声を震わせ そなたを称えるいつもの歌をさえずる一方で
ニコは僕と競わんと 風笛をブーブー吹きならしたのだよ
ニコ。俺の舞踏や歌 あるいは陣取りで
もし今までお前たちの祝祭の宴を損なうことがなかったのなら
この際パスに教えてやろう このニコが紡ぐ巧みな歌物語の秘伝
パス。そなたたちにとって 僕が麦笛を響かせた日々が聖なるものなら
おおニンフよ 味方しておくれ 僕の麦笛に
このパスは ニコの歌がどんな代物か 充分知っているのだから
ニコ。ああ幾度となく 熟れた桜の実をながめる度に
俺の心に浮かぶのは あの愛しいルーカの唇
こぼれる涙を拭うのは 彼女を側に感じられないがゆえに
パス。ああ春のさなか早咲きのバラと出会い 僕は生きる
コズマの甘く紅い唇を支えに
あふれる涙を拭うこともせず 僕は頬を涙に沈める
ニコ。ついこの前 藪の近くで罌をにかけていたときに
ツグミが巣をにかけているのを見つけた
そいつを取ってあげようか 俺の愛しいルーカに
パス。ならば 僕は長年飼ってた格好の良いスズメにした
ミルクのように真白で 呼べば飛んでやって来る
そいつをこの手からコズマの胸に渡すぞ よし決めた
ニコ。ルーカもそうしろって言うから 俺はしょっちゅう言い寄る
俺は近寄った 体はポッポと火照り 胸は期待にパンパンでね
ところがあいつめ パツと逃げて 俺に毬を投げつけやがる
パス。コズマは以前 木戸を開けておくわ と言ってね
僕に入って来いという訳さ 木戸は開いてて 中に入ると
そこで見つけたのは 縄ひも1本 それだけだったね
ニコ。ルーカが姿を現せば 太陽は恥をかくまいと
身を隠すのさ 自分にこう言い聞かせて
ルーカの命あらん限り 我が名声も曇らされんと
パス。コズマが歩み出れば 太陽は有らん限り力を振り絞って
光を浴びせ掛ける 才知が彼に言い聞かせるんだよ

ところで 俺がその場にいたならば きっと訳が違つたろう
 パス。確かにもう一人 がちょうの雌と雄 似たりよつたりの者あり
 しかしそれでも君の歌は 僕には若駒が暴れ回るように聞こえり
 ニコ。この俺の帽子にかけてよくぞいったものだ なぜなら先日のお前の
 歌こそ近隣の者がみな『一体全体どこの驢馬が鳴いているのか』と叫ぶ代物
 パス。ここには老ディコスもおられるが 彼に告げてもらおうではないか
 いずれが尤もな根拠により 妖精たちの麗しき花々を受けるに値するか
 ニコ。賛成だ だが俺は その上さらに大事なものを賭けよう
 一番うまいやつに 褒美が続いて与えられるよう
 俺は大きくしなやかな 白猫をこれまで（これからも）飼っている
 仔鼠の上に君臨する王であり 大鼠の強大なる敵でもある
 形のよい双耳と長い尾を備え 獅子のように曲がった爪
 それをよく引き上げ 持ち上げた前足をぴたりと止め
 みゃーと鳴いてそれを威嚇しては じっと物思いに耽つて
 髭をひとなめしつつ待つ らんらんと燃ゆる瞳孔に獲物を認めるまで
 もしお前が勝てば（ああ哀れな“もー”よ） この猫はお前のもの
 俺がうまく歌えば お前の愛しいコズマの唇は俺のもの
 パス。コズマにキス？ よしきたキスしろ 似合いの相手を用意済みさ
 めんこい野良犬 こいつの名前がなんと「儲け」さ
 耳も尻尾もない方が 名誉を汚さず済むってもんだ
 赤毛のコートに 上等の斑の馬面だ
 黙想なんてまっぴら御免で 1人遊びはお得意よ
 あらゆる蠅に跳びかかり 蚤1匹に立腹よ
 小鼠はよく殺めたが 喧嘩は避けて通る質
 家の中では気晴らしに ちんちんをして跳ね躍る質
 これが僕の質草さ 勝敗はディコスの断に任せるよ
 こんな美味い条件をはいはい出すのも ディコスと君への敬意だよ
 ディコス。さあ歌えよ我が友ら 今までよりも 気持ちも新たに高らかに
 今より拙い歌ならば 我が審判は下せぬに
 ニコ。一体誰が疑おう パスの立派な牧笛が再び取り戻すのさ
 古からの賛嘆を アルカディアに住む羊飼の詩歌に秀でた腕前に
 牧神パンはもう冥土の客じゃない パスが歌い始めたんだからさ
 パス。一体誰が永遠の敬意を示す ニコのあんぐり開いたその口に
 歌が紡がれたその後で 詩神アポロの羽根ペンなんか
 ニコがアポロのその御座に はるかに巧くおさまるに
 ニコ。シリंगाに逃げられて 悲哀に猛り狂ったか
 羊飼たちに初めて嘆きを教えしは パンその人だ
 お前にはパンの声が聞こえぬか そして姿は見えぬのか？

たとえ生に疲れても 生の内にてこの愛を護らむ
斯くあらゆる変化に拘わらず 不変の心を固めむ我は

ドロスとディコスは、支援者たちに大きな満足を与えて歌競べを終えた。とりわけクレオフィラは、親友のドロスに相応しい賛辞を呈することを決して忘れておらず、ドロスは恋の道で更に数歩駒を進めることになる。(とはいえ、その点に関してドロスは、クレオフィラが知っているよりも一層望ましい結末へと事態を上手く運んでいた)。そこに陽気で愉快的な青年が勢いよく名乗りをあげる(その名はニコ)。ニコの舌は、この間ずっとたまらない程むずむずと沈黙に耐えていたのだ。それからパスの様子を窺っていたが(パスはニコの相棒で、ニコと同じくいかれた若者—二人揃って、世間に知れたお調子者)、ニコは次の様にパスへと挨拶し、同様の敬意を払って返礼の挨拶を受けた。

ニコ、パス、ディコスの問答歌

ニコ。そこにいたのか間抜け野郎 ハナっから思っていたよ
これだけ人がいりゃあ 中にはつまらねえ奴もいるはずだってよ
パス。それ まかり出たのは御当人 おお我に幸あれと願わん
これだけいても 君しか血の気盛んな奴がおらぬとは 何とも無念
ニコ。ややっ あんたが どうしてそこまで盲目なのかわかった
灰色ずきんが目隠ししてて いくら目を凝らしても無駄
パス。この灰色ずきんは正真正銘僕の物 たとえさえない色でもね
ドルカスが寝ている隙に 君が抜き取った巾着袋とは訳が違うね
ニコ。あの巾着は俺のだったのさ お前なんか愛に目が眩んでチカチカ
コズマの手から 緑の刺繍入り手袋をひったくったじゃないか
パス。馬鹿だな それが宮廷風の作法というもの 木の皿を盗んで
父君のお仕置きの鞭から 跳んで逃げたのはどこのどいつで
ニコ。へんっ お前のよぼよぼの母ちゃんときたら 杖をかまえると
ラロスの子羊をせしめた罰に お前の頭をしたたかぶん殴ったと
パス。子羊を勝ち取ったのは僕の歌声さ 審判を勤めるはメナルカスさ
その歌比べから ラロスは恥かいて重い足を引きずって逃げたさ
ニコ。ラロスを追っ払っちゃっただって? 小夜鳴き鳥が
自分の歌を ガーガー鴉に邪魔されて逃げる それと同じか
パス。いやいや それを言うなら 小夜鳴き鳥に他の鳥が耳を傾けるのと同じさ
僕の笛と歌は 相手の歌と笛を 黙らせてしまったのさ
ニコ。それも一理 お前のだみ声ときたら 聴く者を音楽嫌いにしてしまう

我らの最良の策は これらの毒蛇から逃げ出すこと
ああ舌よ 不名誉を昇りつめんとする格好の梯子よ
誹謗中傷の能力を名誉とみなすものよ！

ディコス。 ドロスよ お主は激しき非難に気が動転
かように愛は 囚われの身の理性を蝕んでおる
ところでそろそろ歌を結んでも良い時分
これは怒りを煽る原因 君への好意ゆえ与えよう
恋の熱病に冒された者には むしろ同情を
怒りには怒りをといきり立つよりも お主を想って願う
疾く授け給え その情熱に救いや変化を
かの御方は眼差しを 運の星々はその方の御好意を 時折お主に向けますよう
叶え給え 運命の女神は幸運を 自然の女神は健康を 愛神は恋の成就を
静閑なる心しずかをその身に宿すは お主をもって他に誰ができよう
さあさあ わしらの間には元通りの友情を

ドロス。 我こそ手本 恋の過ち熱意にしばしば宿ることは
それでも印 (過ちなれど) 真の心の頭れなり
友想う心に その憤怒を与えしは
汝の言葉が彼の女を 蔑なみしたことを知ればなり
あの唯一なる顔容が 小なき天を成す御方にて
尊顔を見逃せし者 その目はただの節穴なり
最大の喜び生まれる御姿から 隔てられて
狼狽と混沌が この世に投げ出されむ
我が憤怒を込めた邪険への 汝の願いに関して
愛のこもった攻撃には報いなし 我は祈らむ
汝が彼女を愛すれば 汝が知見をも認めん
静閑なる心 (それを自ら傷つけし者たらむ
と汝は見倣すが) 其がとりわけて我を乱さん
彼の女の愛なくば より美しき如何な心も無益なり
唯一彼女の投与こそ 我が食傷の苦悩を控えん
彼の女こそ我が満足の均衡を保つ方なり
その晴やかなる顔容は (他になし) 嵐の中で風を誘う
否 我が安逸が 彼女の女への 不満足を生むより
むしろ 我は永遠に遠ざからう
彼女の女に 悲嘆を招く喜びからは
あまりに甘美な悪疫にて 我が幸なる傷痕も罹う
苦痛が我に死を命じても なお克服せむ死の願いは

良きにつけ悪しきにつけて 汝の中に 乙女が及ぼす力を示して

ドロス。 彼の女の御名に栄あれ 愛しき女が呼ばれる名にて
受けた痛手は慰めに 軛すら快樂以上の喜びなり
彼女の疵は光輝を放ち 責められうる欠点すらも美德となりて
心 眼 耳ですら ここ（愛しい人）にのみ至宝を見出せり
如何なる算術用いても 無限の美点は算能わねど
時間 空間 人生 知性も 稀代のその才 測れぬものなり
彼女の女が怒っているとな ならば太陽は夏の灼熱 それでも
豊作をもたらせり 彼女の女が 悲しいかな姿を隠せば
陽も隠れる ただその優しき影は重荷とはならねど
しかれど恩顔を与うるや 彼女の女の意 自ら満つれば
嗚呼 この時 陽は再び輝き 天球の配置も妙なる調和を奏でる
ヴィーナスさえ 彼女の女を完璧に彩らんと 自ら尽き果てれば
斯くの如 （おお） 我が災厄は寄与す
彼の神聖を投影したる より偉大なる善
我が危害は我に 我が祝福は彼の女へと帰す
斯くして麗しの君は詠まれむ その瞳は 我が指針
その愛は我が命 その怒りは 我が指南なれば
何にもまして あるがままの彼の女こそ まさしく我が守護神

ディコス。 その確かな守りとやらも 明らかに破滅に抱かれしもの
お主自身の言葉が その危うい成り立ちを孕むがゆえに
虚ろいやすい女の眼に 男が怯えたり
主人であるべき理性が 従者である感覚に隷属し
弱きが力及ぼすような場に 己が身の拠り所を求めるならば
愚かしく後悔しようとも すでに手遅れで高く贖われるであろう

ドロス。 もし私が冒瀆の言葉に耳を傾けんとしたならば
この胸を剣の切先に投げ この魂を地獄に売り飛ばしただらう
件の邪なる言葉 さらに邪悪なる息吹より
生まれしその言葉に 我が耳が汚される前に
羊たちよ 必聴せよ 我 狼の姿を認めたり
それは最も猛き者を殺めんと獲物を求め歩き
その胸を抱えきれぬほどの他者の慟哭で満たし
それを抱えすぎて崩れ落ち 弱り果てて滅ぶ者
羊飼の仲間たちよ これらの毒舌を避けよ
魂も感覚すらも毒してしまうその言葉！

すべからく我らが双耳にもたらせよ 甘美かつ健全なるその語り
愛により力ずくで捕らわれたにせよ 狡猾なる愛の罠に陥ったにせよ

ドロス。 仮に太陽の光が天上での住処を恥じ入り
三つ葉の草が羊の眼に不味く映るとすれば
卑しく苦きが愛の最高の使命なり
仮に羊の鳴き声が太陽自らの勇気を奮い立たせるとすれば
さすれば願ってよいか この笛にお与え下さい
称賛する力を 奴隷の衣とて私には飾りとなるその御方をば
いや いや いかなる言葉も自ら高貴である御方を気高くできまい
あなたが疑うに 私を惑わしたのはあの御方の声
あの瞳の豪力には この身はどうてい抵抗できまい

ディコス。 見事な声 見事に飾られた言葉に 危うくわしは捉えられ
寸でのところで我を忘れ 愛の思索を愛でんとて
たとえ不意な歌の結びで そんな思いが消え去ったとはいえ
されば続けなされ お教えくだされ 自ら例となりて
いかにして愛はかように奇妙にも人を虜にし
いかに征服しようとも 攻撃の力を強くして

ドロス。 愛は目に宿り 想いの中で成長し
幼年期は驚異 徒弟期は気配り
思春期は歓喜 成年期は魂が懊悩し
眠れば不安 目覚めれば恋歌にはまり
空想が糧 愛の衣は心配で縫われ
美が愛の本 愛の芝居は恋人たちの不和を語り
眼は注意深い探索 不眠のヴェールで覆われ
愛の羽根は 自暴自棄で切り取られる欲望
惜しみを知らぬ愛の手は 恵みに溢れ
力でまたは説得で いかに達成できよう
征服し その征服を正当化することを
愛の経験は疑い 諸学派は卓上で争う

ディコス。 なれど汝が羊の群れは 満たすであらう汝の希望を
子を産み増やし 見事なる羊毛をつけし故に
されば汝が愛しき乙女も 目と目で授けむ報酬を
汝が我らの魂に 得難き気散じ授ける如くに
乙女の昔の仕種を語り 今の気立てを描いてみせて

公はクレオフィラの嗜好に合わせて羊飼達への讃辞を考え授けた。クレオフィラはこの時大公と公妃とに挟まれて座り、まるで溺死か焼死かの何れかを選択してしまった者のよう。とはいえ、抑制を受けていないクレオフィラの2つの部分、すなわち精神と視線とは、雅やかなフィロクレア姫へと自由に寄り添い、姫の麗しき容貌はそれに対して十分な報いを与えるのに欠けた点などなかった。ただしこの光景が、嫉妬に狂う母の監視を怠らぬ眼には、憎んでも余りある忌まわしいものに映っていることをフィロクレアは気付いていた。ところで老羊飼ディコス、この時までにはドロスを至極気に入っていた。若いにもかかわらず、ドロスには素晴らしい美点^{あまた}が数多あることにディコスは気付いていた。だからドロスの機知が産み出す賜物を喜んで味わいたいと思っていた。ところが主題というのが、何よりもディコスその人が最も見下していた愛を歌うことである。思案してディコスは、次のような牧歌形式でドロスとの歌競べを始めた。

ディコスとドロスの競い歌

ディコス。　ドロスよ　我に告げよ　汝がいつもの旋律は何処や
それはこれらが森に汝の嘆きをこだまさせるもの
汝の愛する聖者はみまかりし　みまかりしは汝の信心なるや
己が愛を高く評する者
自らの信ずることを香しきものと確信するに至りて
心の外の万象を己が心中の甘美なる記章とせんとする者

ドロス。　ディコスよ　貴方が疑われるのは何を以て
我が自明たる愛の信心　それは変わらぬはず　何があろうとも
他の者の善意を疑うは　自らに悪意ありと述べるに等しきこととて
いやそうではない　例え我が気性がこの上なくうつろいやすくとも
いとしき方の輝く徳の光は私の内にこの上なく確かな刻印を施したり
しかるに言えよう　そのような間もない変化などありえぬとも

ディコス。　確固たる心音とは告白を避けぬものなり
仮に汝が愛の絆が高貴ならば　それは周知たるべきもの
沈黙とは卑しさを抑える仮面と見えるものなり
己が愛を誇りに思う者　愛を誉れ高らかに歌う者
他方で告白を恐れ　頑なに沈黙を守り時を待つ者よ
それは科を負う心の後ろめたさが恥じるべき境遇を暴くようなもの
汝　ならば　言葉と声の両者を実に巧妙に紡ぐ者よ

情熱. 理性には目がある だが見えるは己の欠陥ばかり

そうして、互いに近づくにつれて、理性陣営の二人が、あたかも敵に弓を射掛けるかのように、こう歌った。

理性. では 情熱は図太くも理性の光の下に住まえるか？
情熱. ならば理性は情熱の力によって曇らされぬのか？
理性. ああ何と馬鹿馬鹿しき者 栄光を打ち砕かんとするとは！
情熱. ああ何と愚かな 栄光などというこて先の称号を掲げるとは！
理性. 弱虫のくせして 我が精鋭に挑むとは不届き千万
情熱. 弱さで以て お前の力を根こそぎ弱めてやらん
理性. おお尊き理性よ 我が有徳の労苦に力を貸したまえ！
情熱. おお情熱よ、脆き理性の略奪を躲したまえ！
理性. こっちは自力で 日々の葛藤に耐えているのだぞ
情熱. こっちは喜んで 人生の甘い汁を味わうぞ
理性. だがきつと 我らが葛藤はついには平穩を生むはずだ
情熱. 我らには既に平穩がある お前の平穩など無用だ

その後、2つの対峙する方陣どうしの交戦となったが、戦闘の代わりに彼らは互いに抱擁を交わし、次のように歌うのだった。

理性. 我らあまりに屈強なれば 理性は敢えて血を求めぬもの
情熱. あまりに脆い者なればこそ すこぶる寛仁の体を装うもの
理性. 打ち倒す意図はないけれど 我らの大義は正義の大道
情熱. ならば我らが打ち勝とう 我らは邪道で大いに結構
理性. だが情熱よ 終には挫けよ 理性の振う一撃にて
情熱. 我らに如何な利のあるや 理性の軛負うたとて
理性. 君らの持する喜びを 永遠のものと為さしめむ
情熱. さすれば我ら 悲嘆をもって悔恨の情を思い知るらむ
理性. 悔い改めよ真剣に 然るは至福なる由に
情熱. 如何に分かろう至福をば 現在の愉樂を欠きたる我らに
理性. 情熱には知る由もなし 理性によりてそれを知るべし
情熱. 理性には至福を示す技の有りし例なし
理情. ならばさあ 我ら共々席を譲らむ 至福の天の裁定に
その法は 情熱を屠り 理性の刃を削ぐ故に

それから二組の羊飼達は互いに抱擁を交わすと、大公の膝元へと参じた。大

バジリウス公が祈りを捧げ終るや、大勢の羊飼たちが連れ立ってそこへやってきた。(ドロスにつき従って大公を救わんとした人々だ。) 彼らを見てバジリウス公は、再び歌競べを所望しようと思ひ立った。それは次の牧歌集でのお楽しみ。

これにて第二巻あるいは第二幕終了

* * *

第二牧歌集 開演

ファゴナの町の人々の無礼千万な大騒動は終結し、誠実なる羊飼たちは、彼らに伝わる牧歌をその日披露する仕儀となり、“理性と情熱の押し問答”と呼ばれる舞踏歌を皮切りに宴が始まった。即ち、参加する七名の“理性的”羊飼と呼ばれる陣営では、四名が四方形に並び、他の二名は戦闘における陣翼のようにその両側に若干遠めに並び、残る七人目は決死隊のごとくそれらの先頭に立ち、かくして戦いを始めんとする。同様の配置で同じく七名の“情熱的”羊飼は皆、自らの歌声と手に抱えた種々様々の楽器の奏でる音色に足並みを揃えてやって来る。そうしてまず理性側の先頭が歌い始めた。

汝 邪なる反逆者よ 屈せよ 汝が主に

それに正対する陣営の者が応えた。

暴君は要らぬ いざ この戦場を我がものに

理性.	ならば理性が暴君と見なされるというのだな?
情熱.	もしも理性が情熱の自由を束縛するならな
理性.	しかし理性は己こそが統治の適任者と望む
情熱.	そして情熱は己こそが舵を取らんと望む
理性.	おぬしの望みは単なる我がまま されど理性は理に ^{はよ} 嵌る
情熱.	理性の意志は通らぬが 我がままは意志が通される
理性.	情熱に導かれし者は死へと赴く
情熱.	では死なせてやれ さすれば彼は満足して逝く
理性.	本来おぬしは理性に信義を誓った
情熱.	いやいや 我らは兄弟のごとく共に生まれた
理性.	情熱を追う者 苦悩に生きる
情熱.	情熱を見限る者 喜びに欠ける
理性.	情熱は盲目 道も分からずそろりそろり

への奉公として、そうせよと娘に指示したのだから。しかし、それは同じ程度に自然からの嫌悪も免れない。つまり娘のクレオフィラへの愛は、妻が自分に抱いていると思われる猜疑心の憎むべき敵手とならざるを得ないから。3番目の託宣は、大公を最も喜ばせる内容であった。今や彼はその意味をこのように捉えていた。自分はクレオフィラと背徳の要望を達成するであろう、そして後には（ギネキア妃の死去により）妻として迎えるであろう、と。更に最後の託宣については、3番目に劣らぬほどの安堵を受け取った。クレオフィラが、貴女様方もお聞き及びのように、彼の《裁きの玉座》に就いたということを見ると、大公の地位を脅かす勢力はこれによって過ぎ去ったと浅慮を巡らしたからである。このようにして、虚しい希望という提灯持ちの気質が元で、大公は全てを自分に最も都合のいいように解釈した。独りよがりの愛情とはこんなもの。大公の想いは完全にクレオフィラに集中していたがゆえに、神々が託宣においてクレオフィラのみを念頭に置かれていたのだと思い込んだ。これら数多の素晴らしい結果は、空想で織り上げられたと同時に現実に起こったことでもあり、大公はアポロン神に心からの感謝を捧げた。そうして大公は、妃と姫君方のみを残して他の者を全て退散させ（内々で王家の神々に奉納を捧げるときには、そうするのが習わしであった）、供物を納め終えたと、声を合わせて次のように毎年恒例の讃歌¹⁴を歌った。

偉大なる太陽神アポロよ その光、無辺の宇宙を遍く照らす
 さらに我らが小世界にて 内なる眼^{まなこ}を清らかにす
 あなたは常に輝きたまう 夜の帳で御光が隠されようとも
 その光輝常に在^{ましま}せり 無明の闇にて薄れゆくとも¹⁵
 汝 神よ 弱齢にして 大蛇ピュトンの皮を戦利品として纏いしは¹⁶
 （かくも僅かな知の光でも 大蛇の罪を免れるとは）¹⁷
 女神レトの皇子なれど¹⁸ 艱難辛苦の生誕と辛き長旅を経給いて
 善を学ぶに いかな辛勞待ち受けたるかを教え給わむとて
 一生という苦難のうちに （短く冗長な年月よ
 砂時計の儚き砂が落ちる間の） 我ら喘ぎつ求める旅を導き給えよ
 先見の明を授け給え 従う心を与え給え
 その先見が命ずるままに 我らが想いを汝の教えで支え給え
 我らの子孫が繁栄し 自然の秩序が保たれますよう
 なれど 我らが心は鎮め給え 悪にてそれが染まりませぬよう
 常に確かに握らせ給え 我らが信に基づく明断をば
 天を勝ち得るはずもなし この地を捨てることなくば

殴られたいやつは 殴られるまでのこと
ところで たまげた知恵を出したのはどなた様よ
姫様救ったそのお方 そいつはまさに俺様よ

彼奴等は 傷で名誉を飾るがいいや
名誉の負傷をひけらかせ 派手に足を引き摺り歩くさ
最初に奴等を死ぬのにまかせ 後から星を流すがいいや
腐った名誉が 傷の数を教えてくれるさ
ところで 刃からは目玉を 叫びからは耳を隠したよ
全部を救ったお方はどなた そいつはまさに俺様よ

一同はすぐにそれが羊番の頭^{かしら}ダメタスであることに気付いた。彼はまるで自分が敵^{むくろ}の骸を乗り越えて来たとてもいわんばかりに高慢な表情でやってきて、自分が見つけた洞穴という自然の要害を巧みに用いて、パメラ姫を守り通したことが非常に賢明な策であったと自画自賛し得意満面になっていた。しかし本当ならば、もっと確実な安全が得られるまでそこから出たくなかったのであり、大嵐の後でそれが完全にやんでしまっても、ほんの数滴の雨粒が落ちるかもしれないと思うのが、彼のお決まりの流儀であった。一方パメラ姫は（愛する者への気遣いがどれほど心をかき乱すのか今や十分に思い知り）、この機会に乗じて両親の許へと参りましょうとダメタスに催促したのだった一実のところ、愛しい羊飼^{ひと}がうまく危険をくぐり抜けたか、その眼で確かめることが出来るまで、気が気ではなかったただけなのだが。バシリウス公はパメラ姫の姿を見て、頭の中に留めておくべき世継ぎの姫の安否への気遣いが（愛しい他^{ひと}の女のことで頭が一杯だったので）すっかり抜け落ちていた事に鑑みて、突如敬虔な感嘆の念に打たれた。それゆえ、直ちに妻と娘たちにアポロン神への奉納の儀式に同席するよう命じた。「まさに今」とバシリウス公、「神の託宣の持つ力が判ったわい」。だが、そう呟きながら、大公は託宣の秘密を打ち明けるつもりは元よりない。最も信頼する友人、フィラナックスのほかには、今まで誰にも漏らしてはいないのだから。ともあれ、彼は心の中でこのように解釈したのだった¹³。

即ち、大公の長ずる心配は君主の手段で奪い去られてしまうが失われることはないという託宣、それが今や現実になったということである。何故なら、騒乱時に世継ぎの長女の安否への懸念は、いわばクレオフィラが奪ってしまったが、しかし、その土台は彼の心に残っており、完全に失われたというのではないのだから。彼の次する心配、つまり次女は、自然からの祝福を受けて、クレオフィラへの愛を喜んで抱くことになる。何故なら、大公自らが父

が、そのような奉公を行う機会を彼らに与えることは、決して拙い策ではなかった。尤も、群衆は完全に改心し一致団結してこの事に当たったのではない。彼らの顔には、これが一時の苦い薬であること、そして善行を渴望しているわけではないということが表情に滲み出ていたからだ。有り体に言えば、群衆の中で、この罪業の先陣を切った者たちは、恩赦を願い出るなど端から諦め、出来ることならば他の仲間たちに抵抗したいところであった。ところが仲間たちは忠誠心を示す手段を与えられ有頂天になり、暴動の先方となった大半の者どもを潔く片付けてしまった。反逆の指導者となることは、常にその指導者本人への反逆を教えることになるのだ。これまでの仁慈に欠ける拳動が自らの五臓六腑へと染み渡ったために、謀反人たちは正しい判断を働かせることで自ら非を悔いる者となった。やがて大公が恩赦を約束すると、大方の人々は愚行の傷痕を残しながらも家路を辿った。ただし、12名にのぼる僅かな者どもだけは、根深い邪悪さゆえに、安堵の保証を受け入れることが出来ず、さほど遠からぬ森へと逃げ込み、身を潜めて恩赦が本当に遵奉されるか見守った。森では、手当たり次第に草や木の実を食べねばならず、飲めるのは水だけだったので、この連中は酔い痴れたあげくの暴動に十分な懲罰を受ける羽目になったのである。

クレオフィラが浅はかな謀反人たちの思惑のまま危険に晒されている間じゅう、彼女を恋い慕う方々が味わった痛ましいばかりの恐怖。凶漢どもが示す激怒の表情のいちいちに、ナイフを喉元に突き付けられている心地の恋人たちの有様。この物語を御清聴下さる貴女様方に、その様子をお伝えするには、夥しい言葉を用いねばなりません。それを描写するには、身の安全が保障されたことはもとより、それが恋人たちがすべての悦楽を一心に懸けているクレオフィラの手柄であり、しかも無傷の達成を目の当たりにしたのだから、一同皆が言うに言われぬ喜びでどのように感極まったかを貴女様方にお判りいただくのと、同数の言葉を必要とするほど。一同皆で抱擁し合うやら、クレオフィラの美德を讃え合うやら、内に秘めたる情愛を表さずにはおられなかった。ところが、こうした隠しおおせぬ祝儀の真最中に、調子外れに掻き鳴らすギターに合わせた（詩神の権威を蔑ろにして歌い、運命など物ともせず^{しゃかれごえ}に浮かれています）^{しゃかれごえ} 嗟声^{しゃかれごえ}がしたので、その耳障りな歌の方へと一同は目を向けてしまった。その歌は¹²次のようなものだった。

憎悪に満ちた治療とは 憎悪で治療をすることさ
血みどろの助太刀とは 血まみれで片棒担ぐこと
間抜けな事は 抜作どもに係わることさ

ないですか。ああ、あなた方の御先祖が今の時代に甦り、彼らが汗と血を流し叡知を結集して築き上げたこんな立派な国を、選りに選って子孫たちがずたずたに切り裂くのを見たら、何と言って嘆くことでしょう。いえ、いえ、皆様の誠実な御心は、憎むべき隣国人の意に添うようなことはなさらないし、名高い御先祖の意に染まぬほど落ちぶれ果ててはおられない。私の眼には、今や徳高く落ち着いた皆様の表情に、ひたすら皆様の為に政務に邁進しておられる御方への、ただ敬愛と忠義のみが備わると映じるからです。要するに、大公様のお立場の不安定があなた方に武器を取らせた、今、それが安泰であることを確認したのだから、同じ敬慕の念から武器を置きなさい。今すぐ反抗を止めるなら、きっとそうして下さると存じていますが、大公様は、この一件が熱烈な、はっきり言うと、熱烈すぎる敬愛から生じたものであり、他意はないのだと御勘案下さるでしょう。このまま続行すれば、単なる邪悪な大逆非道と成りかねない。しかし、そうではないことが、私にはよく分かります。熱意にほだされて始めたことを、崇敬に胸が一杯で、終止符を打つのですから。」

クレオフィラがとった、その甘美なる雅量と堂々たる柔和とが相俟った物腰は、群衆の心に深く刻み込まれたため（一息ついて平静を取り戻し、その余裕が自分たちの行動に対する疑念を呼んでいた）、騒乱続行への躊躇と中断への恐れとの板挟みとなり、今や群衆の間では、罵声が上がる代わりに、この勧告にのるべきかどうか困惑した呟きしか聞かれない。こんな騒動なぞ起こさなければよかったのにと、誰もが心底から思ったが、しかし（周囲の眼が気になって）いかにして結末を付けるか、誰一人として知る者はいない。怒りを鎮めるよりも燃え上がらせるほうが、結び目をほどくよりも締めるほうが、遥かに容易いことなのだ。クレオフィラは揺らぎ始めた群衆の心を掴んだ確かな手応えを感じて、「アルカディアの民よ」と言葉を続けた、「では私があなた方の為さねばならぬことを表明してさしあげましょう。大公様の御身を案じて武器を手にした方々は、すべからく後方の城門へと翻って退却し、大公様の聖なる御体を傷つけないとする輩にその矛先を向けるのです。」

おお、多頭の怪物、群衆の連帯など、何と脆いものか。気まぐれのみが善行への道案内人とは！ 集団ゆえに恥を忘れ、失敗を仲間になすり付ける、そんな所に何人も信頼を置くべからず。クレオフィラがその言葉を終えるや否や、「大公様万歳！」という声と共に歓喜の叫びが上がった。つい先程まで、大公殺戮を画策していた不逞の輩が、ひどく浮かれはしゃいでその護衛に身を転じた。実際、こうした暴挙の反省としての次のような奉公、それは群衆の判断では、自分たちの不法な暴動の埋め合わせをしてくれるはずであった

うのです？ 一体どちらへ、こうした雄々しい武器を向けていらしたの？ この静かで無害な隠棲別荘に、父祖伝来の敵であるトロイ兵など潜んではいけませんわ。皆様にとって、当面の脅威的であるペルシア人もおりません。ここに逗留されているのは、皆様が敬愛する根拠は大いにあっても、憎悪する理由など全くない方ばかりです。憎むべきは、他の御方でないのは確か。すると私なのですか。アルカディアの皆様、私に対して皆様は怒って武器を向けられたのですか。この私が皆様の激しい^{いさか}諍の種なのですか。もしも無実であることが憤怒の歯止めにならぬとおっしゃるのなら、そして訪ねて来た者を厚く持て成すという慣例はあっても、実際に救助を求めて腕に飛び込んで来た異国の者を守ってなどやれぬとおっしゃるのなら¹¹、とりわけ、こんなにも大勢の勇ましい男性方の豪胆さに火がついて、一人の無害無力な女に災禍^{わざわい}を為すとおっしゃるのなら、私の命を、皆様方の憤怒の生贄にすることも厭いません。危害が他のどなたにも及ばないためでしたら、皆様の激怒を私でお晴らしくくださいませ。アルカディアの方々に受けた厚い恩顧にお応えできるのなら、値千金のこの命に利子を付けてお返ししても私は満足でございます。この命、ここで皆様方にお渡ししますわ。ああ、アルカディアの皆様、もしもそれで満足して戴けるのなら。（世界遍く、賢明かつ平和を愛するアルカディアの民と呼びならわされている）皆様が、愚かにも自惚れて、全国民が一斉に忌み嫌うであろう唯一のことをなさろうとするよりは、その方がましですし、これほどの長期に亘る平和な統治がもたらした恩恵を忘れてしまうほど、恩知らずであるとか、怒りにまかせて、血統正しき大公様の神聖なる御名にひれ伏さぬほど、皆様が人の道に外れていることを人目に晒すよりは、まだましでございますから。と申しますのも、私には分かるのです、このような地獄の狂気が皆様の心に入り込んで、大公様御自身に何事かしでかそうなんて絶対にありえないということが。そのような暴挙は、王位継承者によって処罰されないままでは済みませぬ。たとえ後継者にとって前任者以上に憎らしい癪の種はいないにしても、自らの身の上に省みて、暴挙には厳然たる姿勢で臨まない訳には行かないからです。また、皆様のいつもの果敢さが卑劣な利己心に成り下がり、歴代の由緒正しい先王方によって皆様方へと遣わされた正統な大公様の代わりに、自分らと同輩の臣民による専横なる支配を選ぶなどありえないはず。そんな男の心には、生まれ持った氏素性の卑しさが禍いして、いつも餌食を求める食欲さが必ずや芽を吹き、手にしたばかりの高い地位に不慣れなせいで、疑念に満ちた残虐性を剥き出しにするのが落ち。考えてもご覧なさい、あなた方の敵国にとって、アルカディア人が自らの手で己が政権を転覆させるのを目にするのはまさに思う壺では

するようなやり方を決断した。そしてとうとう、暴徒たちがまさに火を付けようとしたとき、他の人達はそのように命を危険に晒すような真似はなりませんと叫んだのだが、クレオフィラはドロスに木の門を開けさせたのだった。ドロスも彼女を守るため、あらんかぎりの力を尽くさんと彼女の側に身構えていた。そうして、今は抜かずともいつでも抜けるように腰に剣を携え、クレオフィラは群衆の只中に飛び込んだ。群衆一人一人が飛び掛かろうと気は急ぐけれど、先ほどの戦いで彼女の電光石火の剣捌きをいやというほど目撃し（それは一様に軽く流すような太刀筋ではあったのだが）、それで一時息を飲んで躊躇したので、クレオフィラはこの国の流儀にしたがって中庭の門とほぼ目と鼻の先の所にある《裁きの玉座》に辿り着く時間を稼ぐことが出来た。そこで彼女は一呼吸おいて、片手で目前の群衆に合図を送り、彼らを安心させる話があるということを伝えた。

本当に、目に映る彼女の優美な顔は効果^{てきめん}観面である。クレオフィラの見目麗しさ、それはこの危難の瀬戸際にありながら、顔には穏やかな度量の大きさを窺わせるものがあり、さしもの野蛮人どもも称賛で目が釘付けになるほど。人間の本性に従えば、憤怒が相手の抵抗によって養われている間は、猛り狂った暴力を実行せぬままに放っておく訳には行かないが、そんな時に、激怒の的である当人が思いがけなくも身柄を進んで委ねたとすれば、非道な仕打ちに踏み切る前に、少なくとも一呼吸を置くことになるのが人の常である。クレオフィラは（冷静な判断力を失っておらず）、自分が出向いたことがその場の状況を変えたことをすばやく見抜いた。それゆえ、今の有利な状況に乗り、聞いてもらえるうちにきっぱりと話をしようと思い、堂々と怯むことなく、こう言った。「これは尋常ならざる事態です。今まで聞いたこともございません、ああ、アルカディアの人々よ、女が男衆に公的な助言を与えるなど。それもこの国の人々にとっては異国の者が。何にもまして、皆様方の御前で、私のごとき一介の名も無き者が《裁きの玉座》に就くとは。とはいえ、あなた方の突飛な行動ゆえ、そういった事も善のためには必要なこと。あなた方の横暴さが、否応なしに私にこうさせるのです。ですから、男らしい自制心をことごとく失ってしまった男衆に、女が意見を申し上げて差し支えございませんでしょう。然るべき勤めを疎かにする臣下に、異国の者が道理を説いても当然のことでございます。しかも、あなた方の大公様が30年も平和に統治して来られた後に、忠実な国民にあえて御顔をお見せにならないのですから、この座が他国の人間に占有されても不思議であると申せましょうか？　ですから、お聞きなさい、アルカディアの民人よ、そして恥を知るのです！　その猛烈な憤怒を、一体どなたに向かって吐き出そうとい

に即座に取り憑いた。各人が大声で怒鳴り合うところでは、士気を鼓舞する太鼓の音など無用。一人がもう一人にが鳴り立てると、間髪入れずが鳴り声が戻って来る。数多の声から成る不調和な騒音が、彼らの不適切な同意の唯一の標^{しるし}。こういう次第で宴会は戦へと衣替えし¹⁰、どんちゃん騒ぎは血に飢えた激怒に、大公を祝しての祈りは彼の地位を脅かす恐るべき事態へと様変わりした。大公の誕生日の祝宴が、当人の葬式の原因に成りかねなかったのだ。だが、その憤怒の思いには（その邪悪さはさておき）いざ痛め付けてやろうとすればするだけ、どんな方法で痛め付けることができるかということがますます分からなくなるといった愚かしさがあったため、彼らはどのように武装すればよいのかということをよく考えられず、怒りがその手に勧めるがままにあらゆるものを得物として手に取った。ある者は剣や鉞鎌を手にとり、またある者は熊手や馬鍬の農業用具を武具へと変えて手にとり、さらにある者は、人の生命を養うには最適であるところの焼き串を手にして、それを殺傷の道具とした。そして大公の健康を祝して、皆が酒を汲んで飲みかわした酒壺を抱えて大公に仇をなそうと（出来るかどうかはいざしらず）する者に欠けてはいなかった。このように武装し、このように扇動され、怒りに怒りを注ぎ、走ることで激情に油を注ぎ、彼らは太公の隠遁所へとまっしぐらに向かっていった。とはいえ、目指す所に着いた時、自分は一体何をやろうとしているのか、その覚悟をきちんと決めている者は、一人もいなかった。悪行というものは、一つの邪心を別の邪心によって強化せねば持ちこたえられず、この上ない高さに達するまで自ら増殖し、やがては自らの重さに耐えられず倒れてしまう。まさにそのように、一旦従順の境界を越えてしまうと、己が心の弱さは自らをどんどん邪心に開放してしまい、最初はバシリウス公を助けようとし、次に彼を改心させようと偽っていた者たちが、いまや奴を亡き者にしなければ自分たちに助かる道はないと思い始めていたのである。

このような狂気染みた雰囲気の中で、クレオフィラの卓越した勇猛さにバシリウス公の存在も加わり、さらに頼もしいドロスや彼の仲間の羊飼たちの援護もあって、群衆は自分たちの愚かしさを痛切に思い知らされることとなり、ついには瀬戸際まで追い詰められて自棄^{やけ}になり情け容赦なく松明の炎を愚行の先導役にしようと構えた。それを見て貴婦人たちは、哀れな金切り声をあげ、迫りつつある殺戮に息絶えそうな恐怖をあらわにし、とりわけ、たおやかなるフィロクレア姫はクレオフィラにずっとしがみついたままで、救出を望みながら、愛の愚かしさゆえにそれを邪魔しているのだった。一方クレオフィラは防御の術もなければ熟慮の余裕もないことを悟り、残されたただ一つの手段、並外れた大胆さで蛮勇を打ち負かし、危険をもって危険を制

った。とうとう君主本人までが食卓談義にのぼる始末。そういう話題について権威を無視して口にすることが、匹夫の勇をくすぐる壺となったのだ。尊大な言葉が胃の腑で膨らみ、傲慢な誹謗をやんごとなき方々に浴びせることが、その卑しい精神の持ち主達に、偽物の偉大さを羽織らせることになった。

ついに、まさにそのはみを外した言葉の乱用が卑しい心に謀反の火を燃え上がらせてしまい、(自らの知見の無さを咎めるだけの知識が全く無かったがために、己の認識は注目に値すると思ひ込んでしまった) 町の人々は、大公が民から離れて暮らすことにまで露骨に異を唱えだしていた⁹。ともあれ、この連中の持って回ったこじつけを書き連ねるのは退屈ではあるが、要するに、バシリウス公は民を蔑んでおられる、しかるに、もしも民衆がその手で王を支えなければ、王の身分を表明するものなど何もない、民衆なくして、一体誰が彼を大公と呼ぶであろうと。その時、群衆の中で、運命がどう転んでもその境遇がこれ以上は悪くなりようのないほどに身分卑しく、精神はさらに卑しい奴等が口走り始めた。怪しげな異国の女が今じゃ大公を虜にして政事を牛耳っているというのに、アルカディアの人間ときたら、あまりにもお頭が単純なせいで君主に諫言^{つむ かんげん}一つできやしないんだからなど。それならばこの先、外敵を恐れるどんな必要があるのか、実際に打ち倒されることさえなかったというのに、剣を一振りもせぬままに征服されてしまい、秘密は暴かれ、財宝も略奪され、敵に勝どきを挙げられてしまっているのに。アルカディアの国が大公様の目に忌まわしい地と映ったのであれば、それを治める気苦労をなぜ自ら取り除かなかったのか。かように麗しい重荷ならば、快く肩代わりしてくれる者に不足することはなかったろうに。だいたい国は俺たちのものだし、それに政府なんぞは国のお飾りでしかないのに、どうして危険を共有する必要もない俺たちが、わざわざ危険の因を作った張本人と一緒にその危険を共有しなくちゃならないんだ? 「いいや、そんなことをするよりは」と奴らはぶちまけた、「国を挙げて人民が後に付いて来ることを始めようぜ。救い出そう、我らが大公様を外敵の手から。俺たち自身を大公様不在というこの無様な状況から。他のみんなが思っていることを、俺たちが真っ先にやるのさ。みんなにこう言わせてやろう、俺たちファゴナ人は偉ぶった称号なんぞにドギマギするような者じゃねえってことをな。称号なんぞは、所詮空っぽで、俺たちの力がなくては成り立たないのだからな。はてはて、ここまで喋ったからは、ここまで聞いてもらったからには、そいつは実際にやったも同然の罪。ついでにそいつを実行するのに、俺たちにゃ、共和制という強い味方がいたじゃないか。」

これらの言葉はまるで荒れ狂う嵐のように、やる気満々に傾いた人々の頭

住む^こ隠遁所^やへ向かったが、姫がすでに隠遁所から少し離れた所にある、力づくでは押し入ることの出来ない強固な隠れ家たる洞窟に、マイゾ、モプサ、ダメタス（このような事態には、己が父親のためでさえも決して入口の扉を開くような真似はしない男）と共にしっかり身を隠しているのを確認すると、羊飼の小隊を率いてもう一方の隠遁所へと向かった。そこには既に屍と化した荒くれ者三人を足元に、その他大勢の敵どもの血に塗れているクレオフィラの姿が見えた。しかし、彼女も大公も敵の数のあまりの膨大さに傷ましいほど疲れ果て、ついには自らの命を高い代価で売り払ってしまおうかと腹をくくらんばかりになっていた。とその時、ドロスは駆け込むなり、親愛なる友クレオフィラに向かってこう叫んだのだ、「勇気を持って、ドロスが参ったぞ！」こう力づけながら、羊飼の杖で暴徒の一人を打ち倒し、刀を奪い、フィリジデスを初めとする誠実な羊飼たちに果敢に助太刀されて、阻む敵をなぎ倒し、道を切り開いた御蔭で、一同は隠遁所へと避難して、暴徒の集団を木の門の外へ押しやり、閉め出しを食らわせるだけの猶予を稼ぐことが出来た。ギネキア妃とフィロクレア姫が共に愛しその命を委ねている人が無事に戻って来たのを目にした時の喜びようは、もしそれが不屈きな謀反人どもが屋外で立てる荒々しい雄叫びで削がれていなかったならば、筆舌に尽くしがたいほどのものとなったであろう。今や、荒くれ者たちは、そうでもしなければ勝ち目はないと思ってか、見境なく、木戸を焼き払おうと火を探し始めていた。

けれども、それからどうなったのかを御令人方にお話する前に、いったいどんな腹立ちまぎれの言動が、この暴動の端緒となったかをご存知になるのが筋だと存じ上げる。バックス神は、言い伝えによると雷と共に生まれたような⁷。思うにそれが原因でバックスは、以来ずっと煽動と喧噪に満ち満ちていた。このバックスこそが、実は、今起こっている傲慢な騒乱の突撃ラッパを吹き鳴らした張本人だったのである。アルカディアの人々は、君主の誕生日には毎年、身分に応じて振る舞える限りの盛大な祝宴を催すのが古からの習わし。野蛮な見識ではあるが、蛮拳に秀でていることが愛情の豊かさを表現すると考えられたのだ。この宴の習わしは、下々にまで普及していたが、パシリウス公生誕のこの日には、二軒の隠遁所のある荒野の近くのファゴナ⁸と呼ばれる町では、町を上げて大々的に遵奉されていた。葡萄酒に刺激され、また大公の不在をよいことに凶に乗ったその町の人々は、耳に入ってくるどんなことでも酒談義のつまみにした。公的な事柄が私的な恨みつらみと混同され、不服の申し立てを偽らなければ知性に欠けると見なされた。毒づくことが、自由の果実と考えられ、黙すれば、精々褒めても無知が良いところだ

草を食め 我が羊 悲しみも帆を降ろしぬ
我が歡喜を享受せよ 我が辛酸を君らが舐めしように
我らが太陽の輝くうちは 心を曇らす悲嘆も襲撃せぬ
草を食め 我が羊 天資の喜び続けるように
君らの純毛 豊かであれば 我が利は言語を絶するに

歌が終わると、その時ちょうどドロスと一緒にいた若い羊飼のフィリジデスが、まるでドロスの歡喜が自らの悲しみを呼び覚ましたかのように、悲嘆にくれた声音に調律して、ドロスの詩句を自らの言葉で繰り返し、同じ韻を踏みながら、次のような返歌を吟じた⁵。

食むのを止めよ 我が羊 食む暇などないのだよ
我が陽は沈み⁶ 君らの牧場は荒れ地に変われり
嗚呼 汝の憎悪がこの害悪を育めり 残酷な太陽よ

食むのを止めよ 我が羊 涙の驟雨が溢れたり
君らの最も甘美なる花 君らの草は 仕えることなからむ
我が太陽は 悲しいかな 我より永遠に離れたり

食むのを止めよ 我が羊 我が溜息は君らが牧場を焼き尽くさむ
我が嘆きは狼を呼び 我が悪疫は君らに拡がりぬ
我が太陽が沈んでは 盾となり我らを守る何が残らむ

食むのを止めよ 我が羊 悲しみの帆も揚がりぬ
苦痛に泣き叫べ 主人の辛酸を舐めよ 同様に
我が太陽は沈み 心を曇らす悲嘆の急襲が始まりぬ
我が悲嘆の続くのを 止めさせることのなきように
君らに純毛は実らず 我が利は全て失せたるに

しかしフィリジデスが歌の最後の言葉を歌い終える前に、狂った群衆の身の毛もよだつ雄叫びが折悪く彼の情感胸に迫る調べに終止符を打ってしまった。だがドロスの思慮深い愛は、直ぐさま、その双の眸に自らの魂の半身が陥っているやも知れぬ危機を写し出していた。それゆえ羊飼の杖のほかには何一つ武器を持たず（ドロスにとっては杖だけで十分であった。なぜなら今までそれ1本で、畏怖すべき愛という堅牢たる砦の攻略に参入するに不足はなかったのだから）、フィリジデスや他の数名の忠義に厚い羊飼たちが後に続くように自ら模範を示さんとするのだった。いの一番にドロスはパメラ姫の

えろ！」とか、「殺せ！」と叫ぶ者もいれば、「見逃せ！」と言う者もいた。しかし、「見逃せ！」と叫ぶ恩情派でさえ、殺すつもりでいる者に加勢しようと駆けつけた。皆が一斉に命令を下したが、従う者は一人もいない。最も獐猛な奴が一番目立って見えるのみ。營れ高き勇気を常に休ませることがないクレオフィラは、己が剣を引き抜くと、麗人方が隠遁所に辿り着くまでのしばしの間、悪党どもを寄せ付けようとはしなかった。隠遁所からは老いたるバシリウス公、長らく着用していなかった鎧をまとい、臣下に自らの権威を示さんと、あるいはせめて、愛しい女性と共に自らの命を危険に晒さんとやってきた。その合間に麗人方は恐怖に震えながらこの危険極まりない出来事の成り行きを見守っていたが、すぐにクレオフィラは、たった一羽の鷹でも無数の鳶どもに匹敵することを痛感させた。彼女の剣の一撃は、それを受けた敵に悉く十分な報いを与えた。だが、もし気高き羊飼ドロスはその喧騒を耳にして助けにやって来なければ、ついには多勢に無勢で、数を頼みの攻撃の手によりクレオフィラの二本の腕は打ち負かされたであろう。

ドロスは、隠棲別荘からさほど離れてはいない小さな美しい丘陵にいた。他の羊飼たち数人も一緒にいたが、日中の暑さを凌ごうと、ドロスは芳香を放つ天人花が茂る木陰に一人身を寄せ、主人の羊に草を食ませながら、習いたての牧羊笛を練習しては有頂天になって歌を唄っていた。長い間求め続け、最近になってやっと手にした麗しのパメラ姫の愛顧という勝利を祝しての歌である。これは、前途有望な愛情が見込める限りの勝利であり、(変装は解かないながら) 先日、自らの高貴な精神と家柄をはっきりと打ち明けた成果であった。ドロスの歌は、他の羊飼たちが、後に語ったところによると、次のような内容である。

草を食め 我が羊 我が預り物 我が慰めよ 食みつづけよ
陽が昇るにつれ⁴ 君の牧場は豊かに茂れり
嗚呼 この豊饒なる実りを育めるは 唯一なる太陽よ

草を食め 我が羊 君らの甘く真白き乳は流れ出たり
どの花も どの草も 君らに仕えむ
嗚呼 幸いなる太陽よ 其方から全ての恵みは来れり

草を食め 我が羊 君らの実れる野原を占有せむ
狼は恐れて声を立てず 疫病も流行らぬ
嵐からも 我らが最も優しき太陽が盾となって守らむ

互角の熱もつ不可思議な 両の火焰に取り憑かれたり
一方は恋 他方は嫉妬の烈火にて
共に絶えず精進するに 我が平安は見つからざり
それというのも両方が 嗚呼悲し 共に力を携えて
天まで届く一方が 他方を高く支えるためとて
恋は嫉妬の目を醒ます 愛しい人からはぐれぬように
醒めた目は 見れば見るほど焦がれるゆえに

両の火焰はいや増しに増し その火で我は日々燃える
両炎が我を食らいては 我が翼にて舞い上がり
命あふれる喜びは 悲嘆の灰へとなり果てる
両の炎は山となり 我が力は大地にひれ伏せり
炎は力を得て栄え 我は燃え尽き絶え入れり
何たる驚異 我が考えを遙かに凌ぐは
燃料少なく 如何にして 両の火焰の栄えたるかは

ギネキア妃が二人の居る場所へやってくると、心優しきフィロクレア姫が大いに驚いたことに（姫の良心は今ようやく赤面の理由を意識し始めた）、ギネキア妃は、パラス女神が機織りの腕前で大胆にも自分と賞を競おうとした哀れなアラクネに見せたのと同じ²、侮辱の視線を挨拶代わりに娘に対して向けたのだった。とはいえ、愛の力が公妃をしっかりと支配していたので、クレオフィラゆえにフィロクレア姫を憎みはしたものの、クレオフィラゆえにフィロクレア姫には「隠遁所へ帰って一人ぼっちのお父様の相手をしてお上げなさい」と命じる以上にきつい言葉を使うことはなかった。

そうして彼女が焦がれ死にするような想いで一杯の心の倉をクレオフィラに見せようとしたとき、突然暴徒の混乱した騒音が耳に入り、クレオフィラにとってはちょうど良い機会であったのだが、このような退屈な会話を中断し（聞こえてきた声は、決して友人らしき声ではないとよく分かったので）、三人は出来るだけ用心し穏便に隠遁所に戻ろうとした。ところがあと20歩で隠遁所に到着しようという時に、質の悪いごろつきどもに追い付かれ、奴らは激流のように、自分が何処へ行くのかとんと分からないままなだれ込んで来たのだ。そして剣先が届くほどの距離にまで近付くやいなや、怒り狂った獣のごとく、麗人方の地位への敬意もなければ、女性であることへの憐憫もなく、悪党にふさわしい本質をむき出しにして、三人に飛び掛かった。暴力を奮う時にのみ自分達の境遇を幸せと思う奴らであった。しかし数が多ければ多いほど心がバラバラで³、ただ狂気という一事でのみ結束していた。「捕ら

サー・フィリップ・シドニー

『オールド・アーケイディア』訳・注

その3 [第二卷③及び第二牧歌①]

村 里 好 俊／杉 本 美 穂／道 行 千 枝 共
[文学部助教授] [九州大学大学院博士課程] [九州大学大学院修士課程]

山 口 敦 子／山 崎 英 司／岩 下 い ず み 訳
[九州大学大学院博士課程] [九州大学大学院修士課程] [九州大学大学院修士課程]

ところでギネキア妃の休息を知らぬ愛情と猛烈な猜疑心とはあまりに激しく、自分のことを放っておいてくれと、夫を説得してしまうほどであった。ああ、疑惑よ、賢き者の錯乱、善かれと願う悪意、不親切な気配り、他人の失敗をかぶっての自己処罰、他人の幸福とは裏腹の我が身の不幸、嫉みの妹、愛の娘、憎しみの母よ、お前はなぜかくもすばやくギネキア妃の不穏な心に座を占めえたのか。人生の盛りにあって見目麗しく、英邁をもって知られ、その徳の高さは尊敬に価する貴婦人に。お前をそこに植え付けたのは、お前を産んだ愛なのだ。親子の情が負けてしまうようなお前の病の火照りを引き起こしたのは、男女の愛情という燃え盛る苦痛だった。娘が成熟することが自分の朽ち果つることのように思われたのだ。母親の祝福が恋敵の呪詛へと豹変してしまい、彼女の眼には、フィロクレア姫の美しい容貌が死神の画像よりもさらに恐ろしいもののよう映った。これら愛憎という名の悪魔にとらわれて、偉くて惨めなギネキア妃は退屈な夫を避け（夫は夫で妻が勝手に離れてゆこうが構わず、その時迄に娘が自分の使いの役目を果たしているだろうと思い込んでいたのだが）、一人になるや否や奇妙な目つきであたりを見回し、大地の創造物、天の御業すべてに対して宣戦布告をしようとする。が、しかし、彼女の内にある毒気を帯びた熱情があまり多くの言葉を使う余地を与えず、（トロイの女達¹がアエネイアスの船に火を放とうと勇んで出掛けたときと同じような怒りに満ちてわき目もふらず）彼女は娘とクレオフィラが一緒にいるのではないかと思われる場所へまっしぐらに走り向うのであった。その時、途中でふと頭に浮かんだのが、とある昔の唄、自分の今の運命を巧みに言い表していると思える唄。それは次のようなものだが、ギネキア妃には、時が時だけにその唄を口ずさんでいる暇などなかった。